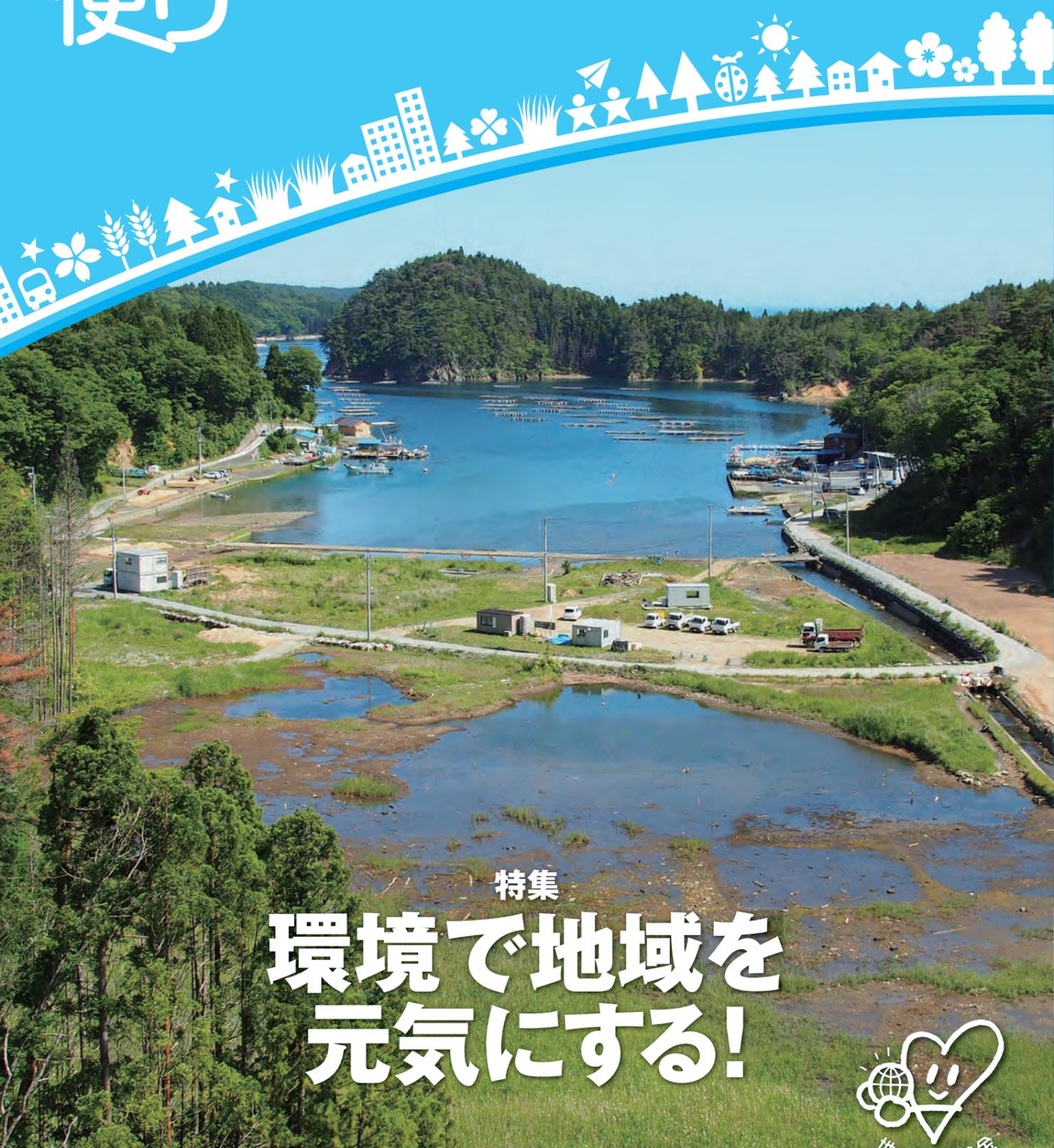


# 地球環境基金 便り

- 巻頭インタビュー：安藤忠雄さん……………2
- 特集：環境で地域を元気にする!……………4
- 助成団体レポート：気象キャスターネットワーク…10
- スペシャルレポート：  
地球環境基金企業協働プロジェクト……………12
- サポーターインタビュー：  
コミュニティ・ユース・バンクmomo……………14
- 地球環境基金のサポーター……………15



特集

## 環境で地域を 元気にする!



舞根湾 (宮城県気仙沼市)

### 地球環境基金サポーターのご案内



「地球環境基金サポーター」とは、継続的にご寄付いただくことで、環境NGO・NPOの環境保全活動をサポートする寄付の形です。皆さま方からのご支援をよろしくお願いいたします。

**サポーターの種類**

毎月と毎年からお選びいただけます。

毎月 寄付金額	500円/1,000円/2,000円/3,000円/ 5,000円/10,000円からお選びいただけます。
毎年 寄付金額	1,000円/3,000円/5,000円/10,000円/ 30,000円/50,000円/100,000円から お選びいただけます。

\*毎年のご支援の場合、指定口座からの自動振替は、翌年以降も初年度と同時期になります。

**ご寄付の方法**

金融機関の指定口座から自動振替をご利用いただけます。  
\*VISA、Masterのクレジットカードをお持ちの方は、下記オンライン(申込書不要)で受付けております。  
<http://www.erca.go.jp/jfge/donation/raise/supporter.html>  
\*申込書を郵送、またはWEBからお申し込みいただけます。

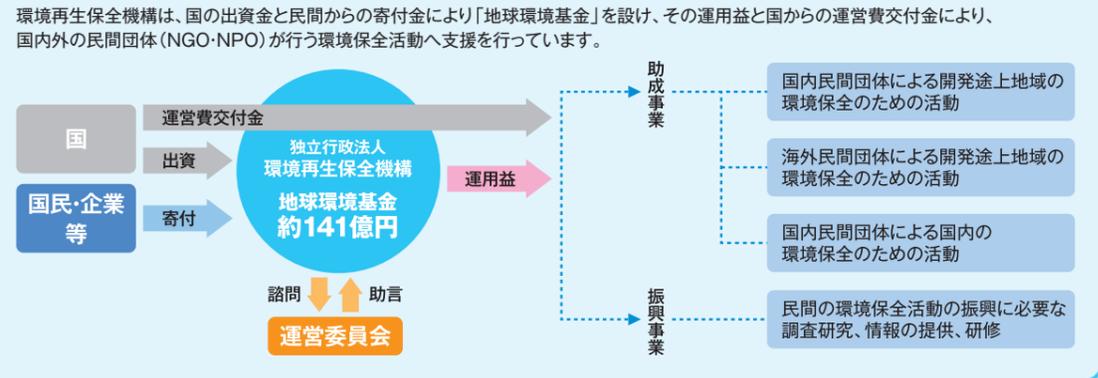
**サポーターになっていただくと**

- 広報誌を発送します。
- お名前をホームページやニュースレターなどで紹介させていただきます。

**\*ご寄付は税制上の優遇措置を受けることができます。**

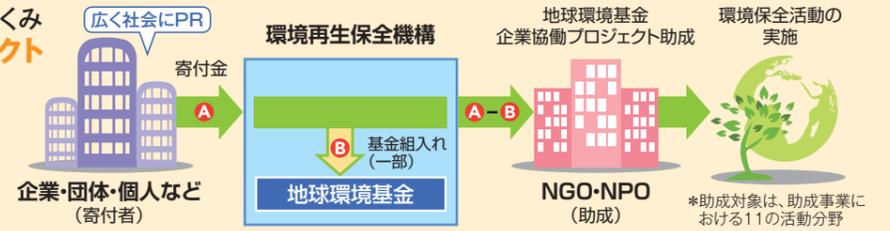


地球環境基金とは



### 寄付者の貢献が目に見える新しいしくみ 地球環境基金企業協働プロジェクト

企業・団体・個人などからの寄付を原資に、地球環境基金が寄付者名を明らかにして、国内外の民間団体(NGO・NPO)が行う環境保全活動へ直接助成を行います。

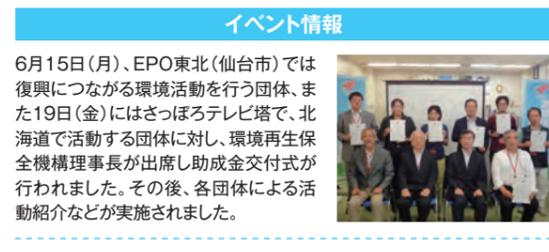


詳細は、<http://www.erca.go.jp/jfge/kigyou/gaiyo.html>



**よみがえった舞根湾**

東日本震災で大きな被害を受けた宮城県気仙沼市の舞根湾。写真手前はかつては耕作放棄地でしたが、津波の浸食で現在は湿地となり、多様な生物が確認されています(本誌6ページ参照)。写真提供：NPO法人森は海の恋人



**イベント情報**

6月15日(月)、EPO東北(仙台市)では復興につながる環境活動を行う団体、また19日(金)にはさっぽろテレビ塔で、北海道で活動する団体に対し、環境再生保全機構理事長が出席し助成金交付式が行われました。その後、各団体による活動紹介などが実施されました。

環境再生保全機構は6日(土)、7日(日)の両日、代々木公園で開催されたエコライフ・フェア2015に参加しました。ブースでは、地球環境基金の説明などを行う他、環境クイズを実施し、2日間で634名の方々が挑戦されました。

**Twitter**

地球環境基金ではツイッターで情報発信を行っています。  
アカウント名：地球環境基金  
アカウントID：@ERCA\_kikin  
URL：http://twitter.com/ERCA\_kikin

**編集後記**

本号では「環境で地域を元気にする!」をテーマに、日本各地での環境NGO・NPOの活動をご紹介します。環境問題に取り組むことは地域を元気にする」という視点に、興味を持っていただけると幸いです。

## 地域再生のシンボル 瀬戸内・直島

1988年ですから30年近く前になりますが、ベネッセの福武總一郎さんから、直島を文化の島にしたいというお話がありました。それで一緒に直島に行ってみると、島は工場から出るばい煙の影響などで、はげ山同然の状態。文化の島にするには、まず美しい海と緑を取り戻さなければなりません。それから30年にわたる闘いが始まるのですが、美術館やホテルの計画を進める一方で、はげ山に苗木を植え続けました。海を見下ろす高台に建物の大半を地下に埋設する形で建てた「地中美術館」は、

## 緑の力で 人とまちを元気にしたい

世界的に著名な建築家として知られる安藤忠雄さん。これまでに国内外で手がけた数々の建築は、その斬新な発想で多くの人に感動とインパクトを与えてきました。そんな安藤さんは、環境保全分野でも地道な取り組みを続けています。ここでは、香川県直島（なおしま）における環境再生とまちづくり、ならびに大阪の中之島一帯や大阪駅周辺で展開している都市の新しい魅力をつくるプロジェクトについてお話を伺いました。

# 安藤

神を受け継いだのが、2004年に発足した「桜の会」の通り抜け」。大阪の中心を流れる大川と中之島一帯は、以前から桜の名所でしたが、この貴重な都市財産をより充実させるため、新たに桜を植樹しようという活動です。この呼びかけに対し、市民から5億2000万円の募金が寄せられ、10年までに3千本の桜を植えることができました。また、中之島周辺の川沿いの風景を豊かにするために、1軒1軒異なる所有者と交渉しながら、ビルの壁面緑化も進めています。

こうした一連の緑化活動の中で、13年には二つのプロジェクトが完成しました。その一つが、大阪駅南側に建つマルビルの緑化。地上30mの高さまでツタなどの登はん性の植物を伸ばすとともに、足元の広場の壁面緑化も実施。大阪のランドマークを「都市の大樹」として再生し、環境都市大阪のシンボルとして世界に発信しています。もう一つは、梅田スカイビルの「希望の壁」。こちらは高さ9m長さ80mの壁ですが、両面をプランターとステンレスネットで構成し、ここにツツジやマブキなどの中低木やツル性、登はん性の植物、多年草を植えました。壮大な緑の壁の風景は、訪れる人々に癒しの時間を与え、心と心をつないでくれることでしょう。いずれも大阪を思う志を持った企業の協力で実現したプロジェクトですが、こういった仕掛けをゲリラ的に行うことで都市の風景に刺激を与え、人々が集まる街角を新たにづくっていければと思います。

これまで私が関わってきたプロジェクトは、社会や地球環境という視点からすれば、地道で小さな活動です。しかし、こうした取り組みが人々の環境やまちづくりに対する意識を少しでも影響を与えることができれば、それはきっと社会を変える大きな力になると信じています。

今では生い茂った木々にすっぽりと覆われています。

また直島では、古い民家を修復・保存し、空間そのものを作品化して再生する試みも行われました。古い町並みにアートのネットワークができたことで、地域に新しい価値が生まれ、「歴史的環境を今に生かしたまちづくり」の好例となっています。もう一つ忘れてならないのは、当初、私たちの取り組みに無関心だった島の方々が、来島者が増えるにつれ、自発的にカフェなどをオープンし、地域に活気が生まれたこと。まちづくりは住む人たちの元気にかかっている……、そう実感しましたね。

昨年の秋、世界で一番古いといわれるパリの百貨店ボン・マルシェで、直島の活動をテーマにした展覧会が開催されました。瀬戸内海の景観の継承、点在するアート、民家の再生、苗木の植樹、そして地域住民の自発的な活動といった取り組みは、地域再生のお手本として世界から注目されています。

## 市民や企業が主導する 大阪での緑化活動

私が生まれ育った大阪でも、緑の力を借りたまちづくりが行われています。古くは「水の都」と呼ばれた大阪には、八百八橋といわれるほど多くの橋がありました。その大部分は市民の手で造られたもので、市民主導でまちづくりを行ってきた歴史があります。この市民参加の精

# 忠雄 さん

安藤忠雄（あんどうただお）  
1941年大阪府生まれ。建築家、東京大学名誉教授。独学で建築を学び、69年安藤忠雄建築研究所を設立。代表作に「住吉の長屋」「大阪府立近つ飛鳥博物館」「光の教会」「淡路夢舞台」「フォートワース現代美術館」「東急東横線渋谷駅」などがある。表彰受賞は79年日本建築学会賞、95年プリツカー賞、2005年国際建築家連合ゴールドメダル、10年ジョン・F・ケネディーセンター芸術金賞、文化勲章、15年グランデ・ウッフイチャレ章など多数。

\*写真提供：安藤忠雄建築研究所



大阪には桜で有名な「造幣局の通り抜け」があるが、こちらは大阪市中心部の大川から中之島に至る「平成の通り抜け」。市民の一口1万円の募金で完成した



年間40万人もが訪れるアートの聖地となった香川県直島。写真は景観に配慮し建物の大半が地下に埋設された「地中美術館」で、地下にも自然光が降り注ぐ設計になっている



2000年、有害産業廃棄物の不法投棄事件「豊島事件」をきっかけに、安藤忠雄さんと弁護士・中坊公平さんが呼びかけ人となり設立した「瀬戸内オリーブ基金」。現在はNPO法人として活動している

# Tadao Ando

特集

# 環境で地域を元気にする！

地方の人口減少・超高齢化という問題に直面している日本。これらの課題を解決するために、政府は成長戦略の目玉の一つとして「地方創生」を掲げ、地域の活性化がこれからの日本を支えるカギになるとしています。本号では「環境で地域を元気にする！」をテーマに、環境を軸に地域再生に取り組んでいる事例を紹介いたします。また、総括インタビューでは、長い間環境保全活動の最前線を歩んでこられた「特定非営利活動法人菜の花プロジェクトネットワーク」代表の藤井絢子さんに、NGO・NPOは地域でどう活動していくべきか、ご自身の経験を踏まえてアドバイスをいただきました。



**あいどうエコプラザ 菜の花館**  
資源循環型の地域づくりを進める拠点施設。BDF・せっけん・菜種油の製造プラントの他、環境学習のための施設を完備。すぐ隣は道の駅「あいどうマーガレットステーション」

住民自身による地域づくり

琵琶湖を第二の水俣にしたいけないと、「せっけん運動」を始めたのが1970年代後半。以来、環境専門の生協を立ち上げたり、家庭の天ぷら油を集めてBDF（バイオディーゼルの燃料）を作ったりと、いろいろな活動に取り組んできました。

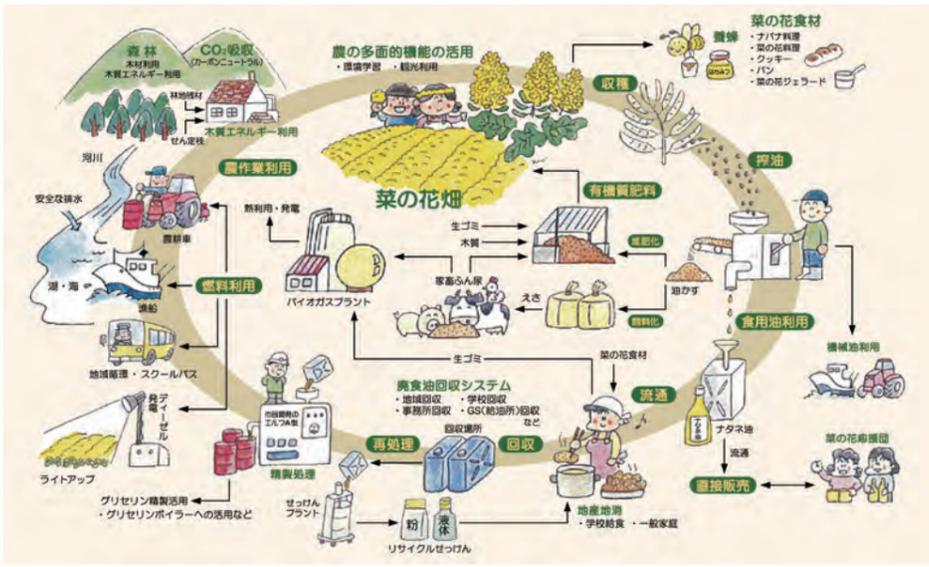
総括インタビュー

GDPでは表せない豊かさもありますが、継続するにはお金が回らなるとダメ。環境に良いことをしたら、少しでも自分の懐が潤う。つまり、事業化することが重要で、行政を動かす際も、その活動が地域経済にどう寄与するか伝える…、そこはとても大切なポイントです。

## つながることから生まれるアイデア

ここ数年、琵琶湖の問題は森の問題でもあったと考え、森に入ることが多くなってきました。この辺りの山はかつてマツケの宝庫で、蹴飛ばすほど生えていたそうです。放置された山をもう一度動かそうと、森の手入れを始めました。まだマツケは生えてきませんが、間伐材を利用して、まきストーブのある家を作ろうといった活動にも発展しています。

私は、自分たちの運動には常に足りないことがあると思っています。だからこそ、いろいろな人とつながることが大切。この地域には、さまざまな分野から100人以上のメンバーが集まる「総寄り」という集会があります。みんなと話せば新しいアイデアが生まれるし、自分たちの活動に足りない知識・技術を持つ人も紹介してもらえる。足りないことを自覚し、人と会い、動くことですね。



## 菜の花プロジェクトの資源循環システム

地域の中で資源がどのように循環し、地域住民がどう関わっているのかを示した図。東近江市をモデルに全国各地で同様の取り組みが進んでいる  
図版提供: 特定非営利活動法人菜の花プロジェクトネットワーク

# 地域にはすごい底力がある

もちろん苦勞しましたが、今思うと、住民自身が参加し行動する中で運動の意味を理解できるようなったことが大きいと思います。住民の意識が「行政は何もしてくれない」ではなく、「自ら行動して行政を動かす」に変わっていったのです。それから、町の人だけでやっていたら、これほど元気にはならなかったと思います。私は、目先の成果だけでなく10年、20年先を見据えて活動することが大切、そして「自分たちだけではできないから、いろいろな人の知恵を借りましょうね」と言い続けてきました。

小金が回る仕組みをつくる

環境先進国・ドイツには何度も行っています。彼らに「日本とドイツの違いがどうなの？」と聞くと、「環境の勉強も大事だけど、私たちは常に儲かるかどうかを考えている」と言います。もちろん、それは良い意味での「儲かる」です。私はいつも「小金が回る仕組みをつくるのが大事」と言っています。せっけんづくりもボランティアではなく、報酬を払う。そうすれば、そのお金は地域に落ちます。もちろん、

特定非営利活動法人 菜の花プロジェクトネットワーク代表、地球環境基金助成専門委員会委員

## 藤井絢子さん

1946年横浜市生まれ。上智大学文学部卒業。特定非営利活動法人碧いびわ湖(旧滋賀県環境生活協同組合)監事、環境省中央環境審議会委員、リサイクルせっけん協会会長、バイオマス活用推進専門家会議委員、内閣府地域活性化伝道師、日本環境会議理事などの委員を務める。著書に『菜の花エコ革命』『菜の花エコ事典』『ナチュラルの菜の花畑から』(創森社)。受賞歴は日経WOMAN「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2003」、「平成25年度地域づくり総務大臣表彰」大賞など。



Ayako

Fujii

眠っている地域の資産を動かす

地方の人口減少についていえば、ここでも大きな家にお年寄り2人暮らしというケースが増えていきます。そのような家を農家民宿として活用するプロジェクトを始め、現在、修学旅行を対象に農家体験ができる農家民宿・民泊が80軒まで増えました。これが軌道に乗ると、眠っていた家という資産が動き始めます。例えば、農家のおばちゃんたちが縁側でカフェを開く。おばちゃんたちが作るおばんざいは旬のものが中心で、すごくおいしい。家ごとに味が違い、それが何よりのおもてなしになります。それから、この道の駅「あいどうマーガレットステーション」は、とても繁盛しています。地域の中には、道

の駅には出店できないけれど、二輪車で運べるぐらいの農産物や売りたいという人もいます。それなら、昨年4月に、農家レストランと高齢者福祉、障害者福祉を合体した施設「あいどうふくしモール」がスタートし、ここで一輪車を開催。出店する一輪車の数が増えるとともに、今やお年寄りのサロンにもなっています。このように、地方にも仕事はいっぱいある。地域は実はすごい底力を秘めているんですよ。北海道から沖縄まで、その地域が好きで動いている人たちはたくさんいます。本気で地域を再生させようと思うのなら、地球環境基金のよう、そういう人たちの活動を支援すればいい。地域を元気にするには、そこに住む人たちがパワーアップするしかないと思います。

## NPO法人 能登半島おらっちゃんの里山里海

ー世界農業遺産「能登の里山里海」伝承と協働のプラットフォーム創出事業ー

http://www.satoyama-satoumi.com/oraccha/

# 大学・行政・NPOの連携が最大の強み



「会員20人でスタートしましたが、協力してくれる人が徐々に増え、現在は30人を超えました。高齢化率約

を担っています。

2006年、珠洲市内の廃校となつた小学校校舎に、金沢大学が「能登半島里山里海自然学校」を開校。この活動に呼応する形で誕生したのが、地元有志による「NPO法人能登半島おらっちゃんの里山里海」。自然学校周辺の保全林の管理作業や、荒廃した水田のピオトーブの復元維持作業などを行っています。また、同じ施設内には珠洲市自然共生室の研究員も常駐しており、大学行政・NPOの三者が同施設で活動することで、地域の環境保全活動の中心的な役割を担っています。

**活動拠点は  
廃校となつた小学校**

現在、同団体が力を入れているのが、里山里海の技術文化を伝えるワークショップの開催です。その中の一つに、「旅する蝶アサギマダラの捕獲調査」があります。5月のワークショップでは、23日の夕方、チョウの専門家を招いて勉強会を開催。翌日の早朝、能登半島の最北端・狼煙（のろし）漁港に集まり、調査を行いました。

**ワークショップで  
里山里海の自然・文化を継承**

45%という地域ですから、定期的な活動はどうしても年配者が中心になります。しかし、大学・行政・NPOによる連携がうまく進み、特に環境教育ではその成果は顕著です。今では、市内の全小学校で環境学習がカリキュラムに組み込まれ、珠洲の生き物を調べて発表する『生き物観察発表会』を毎年1回開催しており、ここには地域の協力農家なども参加しています」と話すのは、同団体の理事の加藤秀夫さん（元小学校校長）。



放置された農業用ため池を手入れし、自生するジュンサイを地元の料理店や京都の卸売業者へ出荷



会員の手入れてよみがえった森。散歩道が整備され、子ども向けのイベントなども開かれている



スナビキソウが好きなアサギマダラ。北上する季節になると、特に珠洲で多く観察される



捕まえたアサギマダラの羽に捕獲地、捕獲日、捕獲者名をマーキングして放蝶

スナビキソウに集まりますが、初参加組は思うように捕獲できません。しかし、捕れたときの感動は大きく、「こんな小さいのに遠くまで北上するなんて不思議だね」「マーキングしたチョウを誰か捕まえてくれないかな」とか、「砂浜を大事にしないと、こ

こには来なくなってしまう」といった声がかれました。ワークショップの参加者は20〜40代で、子ども連れも多いそうです。加藤理事は「これをきっかけに若い世代が保全活動にも参加してくれる」と話します。

## 2つの事例

# 地域の自然資源を 里山里海を生かす

**環境で地域を  
元気にする！**



## NPO法人 森は海の恋人

ーリアスの浜における湿地・干潟保全活動に基づく地域再生ー

http://www.mori-umi.org/

# 成長の原動力は 外部支援者とのネットワーク



1988年「牡蠣の森を募う会」としてスタートし、2009年に「森は海の恋人」と改称してNPO法人化。今年で27年目を迎える活動は、国内はもちろん、海外にも広く知られてきています。これほどまでに有名になった理由は、何でしょうか？ 同団体の副理事長はこう説明します。

**積極的な情報発信で  
基本理念をアピール**

「基本は、身の丈に合った活動を地道に継続したこと。それと「豊かな海を守るには森が大切なんだ」という基本理念を、強く発信し続けたことだと思います。さまざまな分野の方と広くつながることで、地域で活動する団体が育つためのヒントをたくさんいただきました。研究者の方をはじめとする人的ネットワークも、

**新たな自然資源「湿地を  
地域再生の起爆剤に**

東日本大震災で三陸沿岸一帯は甚大な被害を受けました。厳しい状況の中にあつて、同団体は、従来の活動に加え、新たに舞根湾環境調査や震災後の自然環境を活用したまちづくりを始めました。



震災後、舞根地区に形成された湿地。現在、170種の生物が確認されている



伝説となった恒例の植樹祭。第27回の今年は全国から約1,500人が参加



環境保全事業の新たな拠点として2014年に建設された「舞根森海研究所」



15の大学と連携し、震災後、定期的に行われている舞根湾での生物調査

も生かしています。また、震災後の自然環境ですが、この舞根地区に新たな湿地帯が形成されました。かつては耕作放棄地でしたが、これを新たな自然資源と捉え、湿地を守ることで地域再生のきっかけになればと考

えています」と副理事長。被災しながらも、自然との共生を念頭に環境保全活動に取り組んでいる「森は海の恋人」は、これからも多くの人々に影響を与え続けるでしょう。

## 東北を忘れない！ 博物館ネットワークによる支援活動

認定NPO法人大阪自然史センター  
東日本震災関連活動助成2年目

### 中継ぎ役を自認する支援活動

東日本大震災で甚大な被害を受けた東北沿岸部の博物館。本格的な復旧までの間、当地域の子どもたちを対象にワークショップを定期的に開催しているのが大阪自然史センターです。

ワークショップでは、同センターが開発した体験プログラムをベースに、東北沿岸部で見られる化石や、海の生き物などを素材とし、地域の文化や歴史を学びます。

「現地ではハード面の復旧が優先されます。私たちは中継ぎ役として、震災前に博物館が行ってきた普及・啓発活動を少しでも肩代わりできればと考えています。もちろん、現地の方々の協力が必要なので、お仕着せではない、現地の状況を考慮して継続できるプログラムの実施を心掛けています」と話す同センターの西澤真樹子さん。

### 東北を忘れないための試み

本プロジェクトでは、同様のワークショップを大阪でも開催しています。それはなぜでしょう？西澤さんは、「時間が経つにつれ、被災地のことを忘れがちになります。忘れないために、大阪の子どもたちにも同じプログラムを体験してもらい、被災地の現状を伝えていきたいのです。もちろん、私たち博物館に関わる者の現地での活動も伝えま

す」と話します。

本プロジェクトは今年度で2年目。これまで同センターが中心に行ってきたプログラム開発を今後は東北の大学生や現地スタッフと積極的に連携して行い、施設の復旧後を見据えた体制づくりを目指します。



現地の素材にこだわったプログラムは、子どもにも大人にも人気(福島県いわき市)



学生と現地で生物調査を行い、結果をプログラムに反映させる(岩手県大船渡市)

地域で  
Osaka・Tohoku  
絆を深める  
<http://www.omnh.net/npo/>

地域を活性化しようと奮闘するNGO・NPO。ここでは、地域×環境をベースとしながらも、活動内容の異なる4団体の事例をご紹介します。

47都道府県、1741市町村。それぞれの地域で、地元の潜在力を発掘したり、他者との協働・連携を探る中で

地域で  
Mie  
伝統漁法を学ぶ  
<http://osugidani.jp/>

## NPO法人大杉谷自然学校 日本有数の清流・宮川で 伝統漁法を学び、その文化を伝える

### 見直したい地域の資産としての川

総延長91キロメートル。三重県だけを流れる川としては県内最長の宮川(みやがわ)。NPO法人大杉谷自然学校は、その最上流域にある多気郡大台町で環境保全活動に取り組んでおり、サマーキャンプなどで年間約4千人もの子どもたちを受け入れています。昨年スタートした新しい取り組みが「宮川流域における伝統漁法の調査記録、および継承のための環境教育」プロジェクトです。

「昔から宮川ではいろんな魚が獲れ、地域文化として根付いていましたが、徐々に消えつつあります。地元の小学生にアンケートを取ったところ、川で遊ぶ機会がかなり減っていることも分かりました」と話す同団体の岩脇直美さん。

### 伝統漁法の再興を目指して

2年目を迎えた本プロジェクトでは、調査記録を継続しつつ、子ども向けの伝統漁法体験プログラムをスタート。その第1回が5月31日に行われた「作って食べよう！川魚料理」です。「魚なんてさばいたことがないので、最初はみんな気味悪がっていましたが、地元のおばあちゃんに教えてもらいながらチャレンジすること

で、楽しい1日になりました。魚を焼くのも昔ながらの炭を使って…」と岩脇さん。

伝統漁法を継承することは、川を大切に思い守る人を増やすこと。さらに、地域の豊かな生物多様性や環境の保全にもつながります。大杉谷自然学校ならではの取り組みが、子どもたちと川の距離をぐっと縮めてくれるでしょう。



魚のさばき方を習う子どもたち



炭火を入れた一斗缶で川魚を焼く

## NPO、企業、市民が参加して進める 再生可能エネルギーの取り組み

NPO法人環境ネットやまがた  
地球温暖化防止助成2年目

### 初年度から盛り上がる活動

本団体の前身は、環境省の「環境カウンセラー制度」登録者による「やまがた環境カウンセラー協議会」(1998年設立)で、山形県内で先進的に環境保全に関する啓発活動を行ってきました。現在も多彩な活動を展開していますが、その一つに地球温暖化防止があり、本プロジェクトでは市民参加による地域での再生エネルギー導入を目指しています。

「皆さんとても熱心で、初年度のセミナーにご参加いただいた方々の「勉強も大事だけれど、とにかくやってみよう」という熱い思いが原動力になり、地域の個人32名と2団体に出資いただき、本年4月に『やまがた県民自然エネルギー株式会社』を設立。思ったより早い展開で、関わってくださる方々のパワーに驚いています」と話すのは、同団体の山田幸司さん。

### 10月に稼働開始予定の川西町太陽光発電所

当初は2年目に事業プランを策定する予定でしたが、事業化がトントン拍子に進展。この10月には、山形県南部の川西町で準備が進められている出力200kW、年間発電量20.4kW(予定)、事業費約7千万円の太陽光発電所が稼働します。

「今後も地域や市民向けの普及啓発活動は続けていきますが、今

回の具体的な事業は、市民・地域共同発電所のモデルプランづくりに大きく貢献してくれていると思います。これまでに培った事業計画の立て方、それに稼働すれば運用面でのノウハウも得られ、山形ならではの課題など、より実践的な情報発信もできるでしょう」。山田さんは2年目を迎えたプロジェクトに確かな手応えを感じています。



山形市内での小水力現地調査



太陽光発電施設が設置される川西町の現場

地域で  
Yamagata  
エネルギーをつくる  
<http://eny.jp/>

環境で地域を  
元気にする！



地域で  
Yamanashi  
伝統農法を生かす  
<https://ja-jp.facebook.com/teforum>

## NPO法人都留環境フォーラム 在来馬が耕す田畑で 地域文化を継承し農的暮らしを発信

### なぜ在来馬で馬耕？

農業の機械化が進む前、在来馬は農家の大事な戦力でした。しかし、現在では全国で1900頭弱(公益社団法人日本馬事協会調べ)となり、めったに見ることのできない存在となっています。そんな在来馬をパートナーに新たな農業スタイルを目指しているのがNPO法人都留環境フォーラムです。

同フォーラムの岩田和明さんはこう説明します。「化石燃料に頼るトラクターだけではなく、馬耕をサブシステムとして確立したい。馬ふんは肥料になるし、エサは作物の残さや雑草で賄えます。この馬耕を生かすことで、耕作放棄地を田畑に利用しやすくなるなど、波及効果も期待できます。まさに、馬と共に暮らすからこそできる循環型農業ではないでしょうか」

### 子どもたちにも伝えたい馬耕

同フォーラムは、ネットでの情報発信の他、年間30回近くのイベントを開催。参加者アンケートでは、ほとんどの人が「循環型農業や在来馬に興味がある」と回答。岩田さんは「馬耕は今継承しなければ失われてしまいます。私たちの取り組みを知っていただければ、まだまだ多く

の方に参加していただけたらと思います。全国に向けた情報発信だけでなく、今後は、小学生を対象とした馬耕教室を開くなど地域に密着した活動も予定しています」と抱負を語っています。同フォーラムの取り組みは、NHKテレビなどのメディアも取り上げており、注目度もアップしています。



在来馬による田んぼの代かき



陽光の下、希望者が参加して行われた田植え

**現場は美濃加茂市、  
テーマは「ヤギさん除草隊」**

5月30日10時、岐阜県美濃加茂市の文化・教育施設「みのかも文化の森」に、市立蜂屋小学校の5、6年生10名と気象キャスターネットワークのスタッフ、そして本イベントに協力している農業生産法人FRUSICと美濃加茂市の関係者が集合。同団体が地球環境基金の助成を受けて取り組んでいる、子どもたちによる「環境ビデオレポート」を制作するための。今回のテーマは「ヤギさん除草隊」で、同市で実際に環境保全活動の一環として活躍しているヤギを子どもたちの視点からレポートする。



撮影前の打ち合わせで活発に意見を述べる子どもたち

**自分が撮影したところは  
自身で仮編集**

レポートする、そしてカンペ(カンニングペーパー)を持つなど、子どもたちが役割分担して撮影が進行。驚くのは、子どもたちが恥ずかしがらず堂々と担当をこなしていったことで、撮影は1時間半で無事終了した。



撮影の合間にヤギと戯れる子どもたち



パソコンに向かい映像の編集に挑戦する子ども

を引きながらテンポ良く進めていくが、主役はあくまでも子どもたちなので、ポイントとなるところでは彼ら彼女らの気持ちと言葉をうまく引き出しながら進行していく。

また、ヤギに関する「なぜ?」については、その都度FRUSICの渡辺祥二さんが丁寧に説明。このように、それぞれの専門家にアドバイスを受けながら、午前中の学習はあっという間に終了した。

**さあ撮影、ヤギが待つ  
桜広場へGO!**

昼食後、車で5分ほどの桜広場へ移動。柵で囲われた公園の斜面では、20頭のヤギが盛んに雑草を食べている。子どもたちはヤギを見て歓声を上げる。「かわいいヤギに触りたい」「一緒に



全員参加のオープニングとエンディングはスタッフの力を借りて撮影

**ビデオを作ることで  
地域の良さを再認識  
できることもあります**

(左から)気象キャスターネットワークの杉村友希さん、田辺希さん、イベントに協力したFRUSICの渡辺祥二さん、美濃加茂市役所の酒向一也さん



に遊びたい」そんな気持ちでぐんぐん抑え、本番の撮影がスタート。「今日は岐阜県美濃加茂市で活躍している「ヤギさん除草隊」をご紹介します」と、ビデオ冒頭では全員で出演した。それ以降は、カメラを回す、



主役は子どもたち。レポーター、カメラ、カンペをそれぞれ担当



蜂屋小学校 野田葛太朗くんの作品

**助成団体レポート  
行ってみました!  
ビデオ撮影の  
現場**



ヤギさん除草隊でよみがえった様。遠くに雑草を食べるヤギが見える(写真提供:渡辺祥二さん)

本プロジェクトの運営に携わっている気象キャスターネットワーク事務局の水越祐さんは「地域ならではのテーマを扱うので地元を知るきっかけになるし、ビデオを作ることで地域の良さを再認識できることもあります。また、地元で活躍している方々

と連携した活動という点も重要なポイントですね」と話す。今回、撮影したビデオレポート「ヤギさん除草隊」は、同団体のホームページ「子ども環境ビデオレポート」で見ることが出来る。ぜひご覧いただきたい。

取材協力  
NPO法人気象キャスターネットワーク  
<http://www.weathercaster.jp/>  
子ども環境ビデオレポート  
[http://www.weathercaster.jp/k\\_videoreport/](http://www.weathercaster.jp/k_videoreport/)

環境教育の学校出前授業において、全国4,000校以上・受講者数約20万人という実績を誇るNPO法人気象キャスターネットワーク。今回は、助成3年目を迎えた小学生を対象とした「子ども環境ビデオレポート」の現場を訪ねた。

# 子どもたちが作る環境ビデオレポート

**成果はコレ!**

ホームページ「子ども環境ビデオレポート」で見ることができる作品(2015年8月現在)

- ・岐阜県美濃加茂市「ヤギさん除草隊」
- ・千葉県習志野市「谷津干潟へようこそ!」
- ・三重県亀山市「太陽光発電の最前線」
- ・滋賀県長浜市「びわ湖に集まる冬鳥たち」
- ・東京都墨田区「雨水利用」
- ・東京都板橋区「板橋グロークラブ活動紹介」
- ・神奈川県海老名市「命はぐくむ養豚部」
- ・沖縄県名護市「マングローブの不思議探検」
- ・岐阜県高山市「食べて?楽しい奥飛騨の温泉」
- ・愛知県豊橋市「ウミガメはぐくむ豊かな砂浜」
- ・三重県多気町「私たちの町の小水力発電」
- ・北海道鶴居村「タンチョウはばたく鶴居村」
- ・石川県輪島市「わたしたちの町の風力発電」
- ・沖縄県豊見城市「漫湖のいきものたち」
- ・埼玉県羽生市「暑さに負けない米作り」



# 寄付者の想いを確かなカタチに。新プロジェクト、始動!

## 地球環境基金企業協働プロジェクト

# 「つり環境ビジョン助成」

地球環境基金は、本年度より新たな取り組みとして「地球環境基金企業協働プロジェクト」を導入し、その第1号として「つり環境ビジョン助成」がスタートしました。

「つり環境ビジョン助成」…清掃活動など水辺の環境保全活動に対し助成

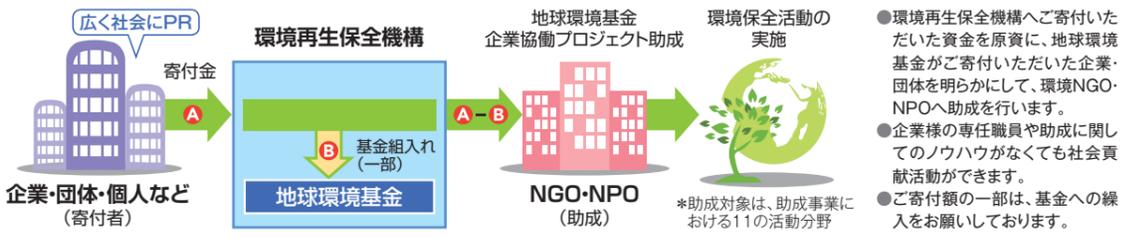
### 「地球環境基金企業協働プロジェクト」の概要と目的

環境NGO・NPOに対する助成で20年を超える実績を持つ地球環境基金。これまでは、企業・団体などからの寄付は地球環境基金に組み入れられ、対象となる活動分野を限定せず、幅広い助成を行ってきました。

一方、今年度から始まったのが、寄付者の社会貢献が目に見えるよう企業名などが明示でき、希望する活動分野に助成できる「地球環境基金企業協働プロジェクト」です。本プロジェクトでは、地球環境基金がこれまで培ってきたノウハウを生かし、寄付者である企業・団体に次のようなメリットをご提供します。

- 募集や審査など、地球環境基金の助成システムの利用
  - 助成に伴う事務手続き
  - 助成先の成果確認と報告書作成
  - 寄付者と助成先の関係構築など
- 地球環境基金は、本プロジェクトの導入により、企業・団体などの皆さまの社会貢献活動が社会に広く認知され、より確かな成果をもたらすものとなるよう、お手伝いしたいと考えています。

### 地球環境基金企業協働プロジェクトのしくみ



# 企業や団体の想いをカタチにする 壮大な釣りの未来をカタチにする

## 新プロジェクトの趣旨に賛同され、さらなる環境保全活動に取り組み 一般社団法人日本釣用品工業会の島野容三会長にお話を伺いました。

### 環境保全は 業界全体の願い

皆さん釣りについてどう思われますか？ 私は釣りは自然に触れながら楽しめる、とても奥の深いエキサイティングなレジャーというスポーツの一つだと思います。しかし、これまでの経緯を考えると環境に負荷をかけてきたことも事実で、今日の持続可能な社会を目指すというコンセンサスを考えれば、業界としてもきちんと対応しなければなりません。この素晴らしい釣りを将来にわたって続けるにはどうしたらいいのか？ その答えとして日本釣用品工業会が策定したのが、釣り環境を次世代に引き継ぐための「つり環境ビジョン」で、これは2012年に日本釣用品工業会会員の総意で決まったものです。その後、具体的にどのような活動を行うべきか会員からアンケートをとり、13年から優先3事業として「釣りの場の清掃」「魚資源の放流」「釣りの場の開放」から始めることにしました。会員が将来の釣り環境を考へての方針です。

### 活動原資と これまでの取り組み

業界としての具体的な取り組みですが、現在釣り関連製品のパッケージなどに「環境美化マーク」の表示を進めており、このマークが付いている製品の売り上げの一部が「つり環境ビジョン」の活動原資となっています。つまり、釣りが、間接的になりますが、釣り環境の保全活動に参加していることになるわけです。もっと言えば、釣り人も会員メーカーもこれからは「釣り環境」の保全を当然のこととして意識することを目指しています。

### 企業協働プロジェクトへの期待

地球環境基金さんについては、失礼ながら、よく存じあげていません。ですから、これまでは活動原資の全てが先ほど説明した「つり環境ビジョン」の優先3事業に使われていました。例えば「釣りの場の清掃」ですが、日本釣用品工業会はプロのダイバー、公益財団法人日本釣振興会はボランティアのダイバーの協力を得て、全国各地の釣り場で地域自治体などの協力の下、水中や陸上での清掃活動を進めています。あくまでも対象を絞った環境保全活動なのです。

### 最後にありますが、「つり環境ビジョン」の目指す未来について、釣りに関わる方々だけでなく、多くの皆さまにご理解を得て協力いただければと考えています。

最後にありますが、「つり環境ビジョン」の目指す未来について、釣りに関わる方々だけでなく、多くの皆さまにご理解を得て協力いただければと考えています。



一般社団法人 日本釣用品工業会 会長 株式会社シマノ 代表取締役社長 島野容三氏 Yozo Shimano

### 2015年度「つり環境ビジョン助成」助成先一覧

- NPO法人アーキベラゴ (香川県)
- NPO法人浅間・吾妻エコツーリズム協会 (群馬県)
- NPO法人荒川クリーンエイド・フォーラム (東京都)
- NPO法人いびがわみずみずエコステーション (岐阜県)
- 海守さぬき会 (香川県)
- 社団法人JEAN (東京都)
- 誇れるふるさとネットワーク (鹿児島県)
- NPO法人ワールドオーシャンズデイ (東京都)

## 助成の現場.2

### NPO法人 ワールドオーシャンズデイ

## タツノオトシゴがすすめる クリーンな海を目指して



参加者で描いたタツノオトシゴの人文字 (片瀬海岸)



片瀬海岸でのゴミ拾いには、子どもから高齢者までが参加



地元高校生による小動岬南方でのアマモの植付け

6月6~7日の2日間、神奈川県片瀬海岸・由比ヶ浜・葉山の3カ所で、第4回「湘南の海クリーンアップ大作戦」が行われ、このうち片瀬海岸のゴミ拾いには386名が参加しました。これは、世界70カ国が参加するワールドオーシャンズデイ(6月8日)前後に開催されるイベントの一つです。7日には、片瀬海岸の腰越漁港近く(小動岬南方)に地元の海洋科学高校の学生が参加し、海の森づくりを目指したアマモの植付けが行われました。片瀬海岸ではゴミ拾いの後、タツノオトシゴの人文字をつくりドローンで空撮。武田真由美理事長は、「この写真を国内外に発信し、運動をもっと広げていきたい」と、今後の抱負を話されました。

## 助成の現場.1

### NPO法人 いびがわみずみずエコステーション

## 総勢2500人による 揖斐川流域クリーン大作戦



グループで参加した中学生



ゴミ拾いをする親子連れと企業からの参加者



ゴミ拾い終了後に行われた小中学生によるアユの稚魚放流

5月31日、揖斐川の上流域である岐阜県揖斐川町の7会場をメインに、流域の大野町、池田町、養老町など12会場で「第16回揖斐川流域クリーン大作戦」が開催されました。当日は、町内会や小中学校、企業などから約200団体・総勢2500人が参加する、大規模な清掃活動となりました。本イベントを主管し、事務局を担当した「NPO法人いびがわみずみずエコステーション」の岩間誠さんによれば、2000年の第1回の参加者は約千名でしたが、年々その数が増えているとのこと。また、当初は活動地域も限定的でしたが、徐々にその範囲が対象流域全体へと広がっているため、今後も積極的に活動していきたいと話されています。

# 地球環境基金のサポーター

## 地球環境基金をご支援くださった方々

地球環境基金に、平成27年1月から6月末までにご寄付・ご支援くださった方々は下記のリストのとおりです。個人や企業・団体としてご協力いただいた方はもちろん、さまざまなイベントを通じて募金活動にご参加・ご協力いただいた大勢の方々に深く御礼申し上げます。

平成27年1月から6月末日現在までに388件、総額 **14,966,881円**のご支援をいただきました。ありがとうございました。

個人	企業	国・地方公共団体
秋元良一 アドバンスクラブ会長 梶谷尚久 天野真咲 飯島さよ子 井坂めぐみ 石田知子 井上雅晴 今川捷子 エグチトモコ オオツカシユンスケ オオツカユウコ オオノヨウコ オカダユウジ 岡本 昇 オギヌマアキコ 奥井美由紀 橘谷裕子 小田龍太郎 唐澤竜一郎 草薙智紀 クドウノリヒコ 組谷雅一 藏重徹雄 コイソヨシミ コサカエツコ 櫻井啓之 佐藤元基 篠原 泰 嶋元 誠 杉安真矢 鈴木康夫 タイラマキコ タカハシヨシコ 高畑雅哉 滝沢米店 滝沢重氏 タサカヒデキ 田中健三 谷口 滋 タミヤショウコ	渡名喜村長 上原 昇 永井夕紀子 ナガオヨシコ 中條宏美 西岡清見 西久保裕彦 野田好和 ハヤシジュンコ 原田広巳 平岡大作 福原未来 本田 聡 本間シズエ 牧 美穂 マツイヨウコ 松本 大 松木正幸 三澤あい 湊 亮策 村瀬岳男 保久村 学 山口 誠 ヨウメイアキコ ヨウメイケンジ ヨウメイサキ 吉田 実 吉田 寧 ヨネダエミ リネットジャパン グループ株式会社 お客様 和久井孝洋 渡 武子	アートバンライン株式会社 株式会社アクセル 浅香工業株式会社 株式会社朝日フィナンシャルグループ イーパートナーズ株式会社 有限会社インターリンク エヌ・ケイ・ケイ株式会社 NTTコミュニケーションズ株式会社 プロキュアメント部 奥野製業工業株式会社 東京支店 株式会社サイバーガジェット 株式会社ジェイアール西日本 デイリースービスネット JNC株式会社 シチズンセイミツ株式会社 GS事業部 シチズンセイミツ株式会社 盛岡事業所 株式会社ジャパンクリエイティブ 公益財団法人ジョイセフ シンワ空調サービス株式会社 セイワエステート株式会社 株式会社そごう西武 株式会社橋フィナンシャルグループ 有限会社第一環境 株式会社トーカイ トータルゼータエンジニアリング株式会社 園田分室 日本紙通商株式会社 阪急阪神ホールディングス株式会社 株式会社引越一番 ブックオフコーポレーション株式会社 ブックサービス株式会社 ファミリーマート 八王子甲州街道店 ファミリーマート 美濃上条店 富士オフィス&ライフサービス 株式会社富士通エフサス 株式会社富士通マーケティング・エージェント 株式会社富士通マーケティング・オフィスサービス 三井住友カード株式会社 東京法人営業部 三菱UFJニコス株式会社 三菱UFJニコス株式会社 マーケティング企画部 ポイントサービスグループ 株式会社宮城運輸 リネットジャパングループ株式会社
		鯉ヶ沢町役場 町民生活課 いちき串木野市役所 生活環境課 内子町役場 内子分庁舎 愛媛県総合科学博物館 海津市長 松永清彦(環境課) 釜石市役所 市民生活部 環境課 川崎町役場 町民生活課 紀北町役場 葛巻町役場 環境エネルギー政策課 久留米市役所 環境部 環境保全課 佐野市 市民生活部 クリーン推進課 山陽小野田市役所 市民生活部 環境課 成田市役所 環境部 環境計画課 日吉津村役場 総務課 北海道地方環境事務所 益子町役場 環境課 宮城県東京事務所 環境省 担当連絡会 湯沢市役所 市民生活部 生活環境課 和木町役場
		岩見沢商工会議所 エコライフフェア2015 NTT全国OB会 電友会五ツ橋クラブゴルフサークル 鹿児島県アジア・太平洋農村研究センター 熊谷商工会議所 さくら会 上越市立水族博物館 しょうないREK事務局 公益財団法人地球環境戦略研究機関 東京農業大学 生活協同組合 一般社団法人日本釣用品工業会 NPO花つぼみ 公益財団法人山形美術館 リサイクル自動車ポッポ (五十音順・敬称略)

### 「地球環境基金便り39号」 読者アンケートにご協力ください

アンケートは、このページのアンケートはがき、およびホームページ「地球環境基金の情報館」のアンケートページ (<https://www.erca.go.jp/jfge/info/publicity/tayori/form/39.php>) において受け付けております。皆様のご意見・ご要望をお聞かせください。

### Present

アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で10名様に、地球環境基金オリジナル・エコバッグをプレゼント(応募締切:平成28年2月末)。当選者の発表は、プレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



### 「ご寄付口座のご案内」 「地球環境基金」へのご寄付は、下記口座より受け付けております。お振込みの手数料は無料です。

銀行名/支店名	口座番号	口座名称
ゆうちょ銀行	00190-0-664214	地球環境基金
新生銀行/本店	普通預金 0789699	独立行政法人 環境再生保全機構 地球環境基金
三井住友銀行/東京公務部	普通預金 3013615	
三菱東京UFJ銀行/本店	普通預金 7637448	
みずほ銀行/本店	普通預金 2413416	
りそな銀行/赤坂支店	普通預金 1023850	

同一金融機関でのお振込みについては、取り扱い窓口でお申し出ください。  
 ①独立行政法人環境再生保全機構は、特定公益増進法人に指定されており、税制上の優遇措置を受けることができます。  
 ②ゆうちょ銀行以外の銀行からお振込みいただく場合には、領収書が発行できません。領収書の発行を希望される方は、お手数ですが、地球環境基金部基金管理課(TEL:044-520-9606)へご連絡ください。  
 ※この他にも、クレジットカードを利用したご寄付や、楽天銀行を利用したご寄付が可能です。詳しくはウェブサイトをご覧ください。  
 地球環境基金の情報館 <http://www.erca.go.jp/jfge/>



今回はNPOへ直接融資を行っている「コミュニティ・ユース・バンク momo」の活動を紹介します。お話を伺ったのは代表理事の木村真樹さんです。

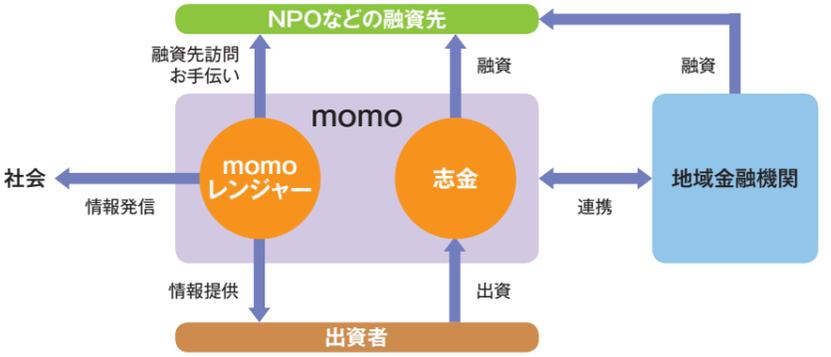
**10年間、融資事故ゼロという実績**

2005年に融資を始めて今年で10年目。500人を超す個人と団体からの出資金約5千万円を原資とし、14年末時点の融資累計は約1億3千万円。ただし、出資に対する配当はありません。

「地域には社会に貢献する事業を始めたいと考えている方がたくさんいます。地域には社会に貢献する事業を始めたいと考えている方がたくさんいます。地域には社会に貢献する事業を始めたいと考えている方がたくさんいます。」

「momoレンジャー、これこそが私たちのウリ! 融資して終わりではなく、実は融資後のサポートこそ大切だと考えています。ウェブサイトの構築

momoの活動は、出資を集めて融資を行うだけではありません。その大きな特徴となっているのが、20〜30代の若者による「momoレンジャー」。彼らは民間企業や官公庁、大学などに所属しながら、ボランティア活動として各自が持つスキルを生かし、出資者と融資先をつなぐ役割を担っています。



「社会貢献活動を行っているNPOにも優良な融資先があります。ただ、NPOと付き合う経験の少ない金融機関の方には、融資の適否を判断するのが難しい。そこで始めたのが、金融機関の職員を対象とした勉強会です。とても好評で、最近ではNPOも地域の大切な融資先の一つとして認められるようになってきました。とにかく、地域が自立するには、地域内でお金が循環しなければなりません。それが、お金の地産地消です」と、代表理事の木村真樹さんは熱く語ります。

momoは、愛知岐阜三重の東海3県を対象地域として活動していますが、他県の行政や地域金融機関からも注目されており、勉強会の開催がいくつか進行中とのこと。ちなみに、momoは本年5月、こうした取り組みが評価され、日本経済新聞社の第3回「日経ソーシャルイニシアチブ大賞」国内部門賞を受賞しました。



木村真樹(きむらまさき)  
1977年愛知県生まれ。大学卒業後、地方銀行勤務を経て、A SEED JAPAN事務局やap bank運営事務局スタッフなどを歴任。2005年にコミュニティ・ユース・バンクmomoを設立し、若者たちによる「お金の地産地消」の推進や、市民公益活動へのハンズオン支援活動を行っている。公益財団法人あいちコミュニティ財団代表理事、NPO法人日本ファンドレイジング協会理事なども務める。



「お金の循環で地域を創る」  
**全国に広げたい。お金の地産地消。**

「社会貢献活動を行っているNPOにも優良な融資先があります。ただ、NPOと付き合う経験の少ない金融機関の方には、融資の適否を判断するのが難しい。そこで始めたのが、金融機関の職員を対象とした勉強会です。とても好評で、最近ではNPOも地域の大切な融資先の一つとして認められるようになってきました。とにかく、地域が自立するには、地域内でお金が循環しなければなりません。それが、お金の地産地消です」と、代表理事の木村真樹さんは熱く語ります。



「お金の地産地消白書2014」  
地球環境基金の助成を受けて作成された36ページの小冊子。地域金融機関がNPOを支援する際に必要となる基礎知識や情報を掲載。現在、各地で開催されている地域金融機関の職員向け勉強会で、テキストとしても使用されている。